

第 II 部

Aさんの乗馬コース初挑戦	笹本 健
「馬」のもつ魅力と子ども達の活動	當島 茂登
ポニーを用いた特殊学級の子どもたちへの指導	飯島 友子
地域交流活動の一環としての乗馬	宮林 文代
馬を用いた活動導入の試み	鈴木 卓郎
養護学校における在来馬とのかかわりを活かした学習の試み	安川 千壽子
馬を用いた指導の開始と充実した展開のために	滝坂 信一

Aさんの乗馬コース初挑戦

笹本 健

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

1990年来、国立特殊教育総合研究所やその他の場所において年間2～3回程度の頻度で「治療的乗馬：乗馬の学習」の実践を行ってきた。近年、研究所における乗馬の学習では対象児・者の状況に合わせ、角馬場（長方形のフィールドにおいて、主として身体的側面や心理・教育的側面に働きかける）での実践と丸馬場（直径約16メートルの柵の中で、乗馬レッスンの形を取り、スポーツや趣味としての乗馬へと向かうかかわり）での実践を行っている。

1. Aさんの馬との出会いと経緯

Aさんは重度の発達遅滞（特に知的側面）があるといわれ、視覚的には近視性乱視と診断されめがねをかけている。歩行は可能であるが少し前屈みで、階段を上がるときや、ものをまたぐときの動きはぎこちなくなる。とても穏やかですなおな性格である。

乗馬の学習には初期の頃（1990年：当時15才）から参加しており、当時からの課題は馬に乗ることを通じて身体のバランス感覚や運動感覚を促進したり、サイドウォーカー（補助者）とのやりとりを通じてコミュニケーション能力の促進を図ることであった。すなわち、Aさんへのかかわりはもっぱら角馬場で行われていた。

初期の頃のAさんの乗馬の様子は、馬に乗せられることや乗っていることには拒否はしなかった。嬉しそうな声を時々出したり顔に当たる風のために少し顔をゆがめたりするが、全体的には、いわゆる乗せられたままの状態であり、表情も余り変化がなかった。

角馬場の各コーナーで方向が変わるたびに重心が外方向へとズレて、そのままにしておくとうずると落ちてしまうといった状態であった。また、なみ脚（馬がゆっくり歩く歩容）が続くと飽きてしまうのか、自分から補助者に手をさしのべ、身体を預けながらその場で降りてしまうことが時々あった。

自動車に乗ることが好きなため、馬から下りた後は必ず駐車してある自動車へと向かっていった。さらに、乗馬へと誘う順番やタイミングがずれてしまうと、馬には近寄らずに車の方に向かって行くことがしばしばあった。

このようなAさんの状態が乗馬の学習において大きく変化したのは、1996年（平成8年8月）に福島県常葉町檜山

高原で行われた2泊3日の乗馬合宿以降であった。

そこでは、起伏のある斜面を利用して、なみ脚ではあるが変化に富んだ角馬場での乗馬学習や最終日には1キロメートルほどの乗馬トレッキングを行った。この時Aさんはとても楽しそうに馬から下りることもなく課題をこなしたが、特筆すべきは、補助者の声や腰付近に触れることによって注意すると時々ずれてくる重心を自分で直そうとする様子が見えだしたことであった。そして同年9月に国立特殊教育総合研究所で行われた乗馬学習では、角馬場における乗馬中に、ずれていく重心を自分自身で動いて修正することが頻回に現れてきた。

その結果、以前よりも乗馬の時間が長くなり、なみ脚から時々早脚を交えた学習が可能になってきた。早脚の距離は短いものであったが、声を出して笑い、喜んでいる様子が参加者全員に理解できるほどになってきた。

Aさんのこのような成長ぶりや保護者からの要望も配慮し、2001年9月（25才時）に行われた乗馬の学習会において、初めて丸馬場における通常の乗馬のレッスンという形式を取り入れてみた。

以下その様子について詳述する。

2. 丸馬場で起こったこと

Aさんは、この頃になると乗馬の順番を待てるようになり、こちらの声かけから手を持って誘導すると真っ直ぐに自分が乗るべき馬に近づいて行くようになっていた。今回も、いつも角馬場で乗っていたシャイアン（馬の名前）が角馬場にいるにもかかわらず、丸馬場で乗るべき馬（ポコ）へと手をつないで誘導すると、素直にポコへと近づいていった。

丸馬場の外でポコに乗ることとした。乗馬の際は、いつも保護者（父）も援助に加わるが、今回もポコに極めて自然な感じで乗ることができた。ポコにはウエスタンの鞍が装着してある。Aさんにとっては、鞍付きでの乗馬は夏の合宿以来である。ポコは引き馬にして、2人のサイドウォーカーがついた。（写真1参照）

丸馬場での課題は、馬の発進の合図を自分自身で意図的に行うこと（発進してほしいときに自ら馬に合図を送る）であった。同様な課題は、以前には「ハイ」と声を出したり、手を挙げたりすることであったが、今回はじめて両脚のかかとで馬の腹を軽くたたくようにするという動作を取



写真1 サイドウォーカー付きで常足

り入れてみることにした。

以前のやり方は、Aさんが合図を送ると御者が馬を発進させるというように、いわゆる間接的な発進の合図であったが、今回行う合図は、以前とは異なり直接的にAさんの合図(意図)が馬に伝わるという意味合いを持っている。

鞍付きでの乗馬になれるため、丸馬場内でポコを3週ゆっくりした歩調で回らせた。Aさんは心理的な固さもなく、極めて自然な様子であった。4週目に両手を広げてサイドウォーカーにゆだねるということを行った。これは、腰部でしっかりと馬の反動を受け止めながら乗るということを体験するための方策で、日頃乗馬学習でよく行われる手だての一つである。(写真2参照)



写真2 両手をサイドウォーカーにゆだねる

Aさんは「手をください」の声かけに素直に従い、両側のサイドウォーカーに手をさしのべ、そのまま乗馬を続けた。乗馬の状態はごく自然に腰部の動きが出ており、安定感があった。2週ほど回り、ポコを止め、サイドウォーカーをしているSはとてもしよい乗り方をしている旨をAさんに告げた。この時の発進の合図は以前と同じく、Aさんに「はい」と合図してもらった。明確な合図ではなかったが

Sには意図が伝わってきたので馬を発進させてもらった。

Aさんは両親の方が気になっているらしく、さかんにその方向に顔を向けるが、馬を下りようとする様子もなく、乗馬を味わっているといった感じであった。

次に、馬を止めてもらって「今度は脚でこうしてここをつつくようにすると、ポコは動き出すよ」と説明し、その脚の動きを両側のサイドウォーカーがAさんの脚を軽く持ち他動的に動かしながら伝えた。それから少し待つとAさんは小さく両脚を動かしたので、「そうそう」と声かけし、御者にポコを発進してもらった。(写真3、4参照)

さらに1周し、馬を止めてもらってAさんの両脚での合図を待った。この時サイドウォーカーにはAさんの脚の動は伝わってこなかった。さらにもう1周の後、Aさんに発進の合図を指示すると小さい動きではあるが、両脚での合



写真3 手を添えて動きを説明



写真4 「どう、わかった？」

図を行った。この時ポコは御者の合図(手綱を軽く引く)ではなくAさんの合図で発進した。

Aさんはポコが発進した直後に、「えへー」と嬉しそうに笑い、両親の方を見た。

この後、このような両脚での合図による一連の発進練習が5～6回繰り返され、いずれもAさんは上手に脚での合図を行うことができた。Aさんは発進の合図の意味を理解したようであった。

しかし、練習も終わりに近づいた時であった。ポコを止めた後、サイドウォーカーはAさんが当然行うであろう両脚での合図の動きを期待しつつ待っていたが、前回のようにはAさんの両脚の動きは出なかった(ようにサイドウォーカーには捉えられた)。そしてポコも止まったままであった。

ポコは耳を後ろ側に立て、合図される部位である脇腹あたりの皮膚を時々細かく痙攣させ、じっとAさんの合図を待っている様子であった。

この時、御者はかるく手綱を引いてみるが、ポコは動かなかった。

暫くその状態(静寂)が続いた。(写真5参照)



写真5 静寂の時間

ずっとポコが動いた(発進した)。

この瞬間、張りつめていた空気が緩み、再び引き馬での乗馬学習が始まった。

3. その状況の意味するもの (前述の点線内で記述されている状況)

当日行われた検討会で、この時起こったことが話題となった。現場に居合わせた全員が、ポコが動いたのは偶然とは言い難いとの見解であった。すなわち、サイドウォーカー等が外部から捉えられなかった何らかのAさんからのメッセージがポコへ届いたというのである。しかし、このことを科学的(客観的)に証明することは残念ながら今の時点では不可能である。

誤解を恐れずに、偶然とは言い難いその状況の背景について言及してみる。

丸馬場でのAさんの課題は、前述したように馬の発進の合図を自分自身で意図的に行うこと(発進してほしいときに自ら馬に合図を送る)であった。サイドウォーカーで指導者でもあったSはその手順をAさんに理解してもらいたいため、再三にわたり説明と実際的な体験を通しAさんに関わり、Aさんもその意味を理解したと思われる。

しかしながら、その状況から、上記のような関わりを機械的に反復するだけでは、実際にはAさん自身がポコに発進してほしいときに自ら合図を送るという課題へと向かうことにはなり得ていない、ということが示唆されるのである。

すなわち、両脚を動かさなかったのは、Aさんの意図(合図をしない：今は動かさない)であった可能性があり、当然Aさんが脚を動かすものと期待していたサイドウォーカーの思惑との齟齬が生じた瞬間であった、と捉えることができる。

私たちは、ともすれば私達自身が組み立てた指導の目標やそのための手順を唯一正しいものとして捉え、対象となる子どもや成人が、意図したことは異なった行動をとったとき、私達自身の見方や在り方を省みずに「偶然」であったかも知れないとか、例えば上記の場面では御者や馬の状態はどうであったか、というように他律的な要素(指導者自身の存在を排除した環境要素)のみを探求しようとする傾向がないであろうか。

乗馬の学習の場合、特に馬と子どもの「ことば」を超越した生の通じ合いの場面を大切にするためには、指導者の存在を指導者自身が常に振り返ってみるという基本的な態度と、それに基づき実際的な関わりから一步引いてみて、子どもの様子や馬と子どものやりとりを静かにうかがうことが重要かつ不可欠なことと思われる。

おわりに

10数年来、Aさんの事例だけでなく多くの様々な障害がある子どもたちとの乗馬の学習を行ってきた。その学習を通して確実に言えることは、全ての子どもたちが馬に対して大きな興味関心を寄せ、触りたい、乗りたいという心を持つ、ということであった。なぜそうなのか、といった探求についてはこれからの研究に譲るとして、このような状況を裏付けるであろう興味深い資料として、イギリスで4歳～14歳の子ども4200人に対して行われた「好まれている動物」に関する調査結果がある。この結果によると「馬」はチンパンジー、一般の猿、に続いてベストテンの3位に位置している(マンウォッチング～人間の行動学～デズモンド・モリスより)。

端的に、私たち（指導者）は馬の持つこのような子どもに対する求心力にすがって教育上のさまざまなアプローチを展開してきた、といっても過言ではないであろう。

さらに、「馬」は単なるコントロールされた「もの」としての教材では決してない、ということも指導上の大きな利点として挙げることができる。それは、「馬」にもいわゆる人格に相当するものがあり、そこに生じる相互交渉が子どもに対しても指導者に対しても関係を作り上げるという

実感をもたらし、指導もこの3者関係の中で成立すると言う点である。

今後、ドイツやその他の障害者乗馬の主要国における知見等も踏まえながら、乗馬の学習に関する具体的な展開の内容・方法についてさらに検討していきたい。

※ Aさんの事例報告および写真掲載については、内容を確認の上で保護者の了承を得ています。